

「鹿児島がん患者の ACP 実装プロジェクト」研究支援

研究分担者

下山 理史 愛知県がんセンター 緩和ケア部

研究協力者

山岸 暁美 慶應義塾大学医学部・衛生学公衆衛生学教室

研究要旨： 現在本人の意向を尊重した医療・ケア体制が整備されつつある。一方で、実際各地域においてどのようにその体制を整備していけばよいのかについては混とんとしている。ただし、地域における緩和ケアを考えたとき、患者の意向に応じた療養環境を整える観点で、この体制整備は欠かせない。今回は、鹿児島にてがん患者の ACP 推進のためのプロジェクトが行われると聞き、このプロジェクトを支援した。ここで得られた情報を作成した地域緩和ケアネットホームページ上に反映させる予定である。

A. 研究目的

地域における緩和ケアを考えたとき、患者の意向に応じた療養環境を整える観点で、この体制整備は欠かせない。今回は、鹿児島にてがん患者の ACP 推進のためのプロジェクトが行われると聞き、このプロジェクトを支援することとした。これにより本研究班にて作成しているホームページ上に患者の意向を反映させることを目的とした。

B. 研究方法

支援を行ったのみだが、添付の報告書にあるような以下の方法で本研究は行われた。

アドバンスケアプランニングについての医療福祉関係者間のグループワークで出された意見について、大筋を短時間で把握できることを目的とした質的な分析を行った。会話を通読してなるべく大きな解釈可能な意味単位として質的に分析を行った。

（倫理面への配慮）

研究そのものではなく研究解析に関する支援を行ったのみなので本件に関する倫理的配慮は特段必要としなかった。しかし、報告書において、引用文等は匿名化して意味が通じやすくなるように適宜修正したりされている。

C. 研究結果

研究による結果は以下の通りである。

ACP の目的は、「ACP の目的は患者の希望や思いが尊重されることである」との意見が非常に多かった。患者の意思表示できなくなった時の治療を決めることを目標として挙げたのは、身寄りのない独居の方の場合には課題になるとの指摘があった。

ACP をすすめるうえで必要なことは、1) 医師からきっかけとなる病状説明があること、2) 患者のいいタイミングで話すこと（タイミングをはかることが重要であること）、3) 多職種で複数

のセッティングで患者の思いをその都度無理なくひろっていくこと（一度にするものではないこと）、4) 経時的な推移や変化がわかること、5) 地域全体で患者の思いを共有できるツールがあること、が語られた。

本研究班ではこの結果を受けて、地域緩和ケアねっ度ホームページ上に患者の意向を反映させるための工夫を行った。

D. 考察

患者の今の考えや思いを地域全体でつないでいく、今を支えていくための枠組みを増やしていく、そのためにはどういう方法が必要なのかに関心があるようであった。地域内で患者の思いや考えを無理のないように聴き、それをケアに反映する、時期や場所が変わっても思いがつながるようにツールも使ってやり取りし合う、その結果、患者や家族が「ああよかった」と思えることが目指されていることが示唆された。

E. 結論

患者支援の観点で、患者の意向を無理なく聴くことによりそれがその後の医療・ケアに反映されるための枠組みが必要であり、その一つが本研究班で作成した地域緩和ケアネットである。このホームページ上に患者の意向が反映されることでいづどこにいてもその情報を共有することが可能となり意向が反映されるようになることが期待される。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3.その他

なし